

大明治四十五年本邦鑛業ノ趨勢目次

總 說

第一章 鑛業ノ出願

第一圖 出願件數地方別

第二章 鑛區

第二圖 鑛區數地方別

第三章 鑛產

第三圖 鑛產價額累年比較

第四圖 鑛產數量及價額累年比較(金、銀)

第五圖 同 (銅、鐵)

第六圖 同 (石炭、石油)

第七圖 鑛產價額地方別

第八圖 世界鑛產額主要國別(金、銀)

第九圖 同 (銅、銑鐵)

第十圖 同 (石炭、石油)

第四章 鑛產物ノ輸出入

鑛產物ノ輸出入

第十一圖 鎌產物輸出入累年比較 一二三

第五章 鎌業ニ對スル放資 一二九

第六章 鎌產物ノ市價 一二九

第十二圖 銀市價 一二九

第十三圖 銅市價 一二九

第十四圖 鉛市價 一二九

第十五圖 錫市價 一二九

第十六圖 鐵市價 一二九

第十七圖 石炭市價 一二九

第十八圖 石油市價 一二九

第七章 鎌山事業ノ概況 一五五

第八章 鎌山變災 三九七

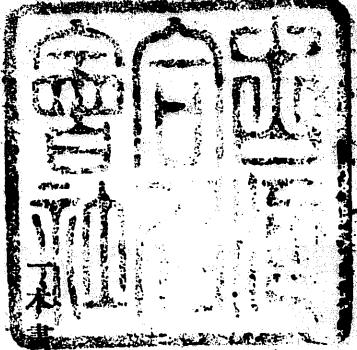
第十九圖 鎌山變災ニ因ル死亡割合累年比較 三九七

附 錄 朝鮮、臺灣及樺太ニ於ケル鎌業 三九七

一 朝 鮮 一

二 臺 灣 一

三 樺 太 一



凡

例

本書ハ主トシテ本邦内地ノ明治四十五及大正元年中ニ於ケル鑄業ニ關シ其概況ヲ輯錄シタルモノニ係ル

但シ朝鮮、臺灣及樺太ニ於ケル鑄業ニ關シテハ参考ノ爲メ其主管廳ノ調査ニ依リ附錄トシテ載錄セリ

一編纂時期ノ關係上統計材料中精確ナル調査ヲ遂クル能ハサルモノニ付テハ便宜明治四十四年ノ事實ニ止メ又ハ推定數ニ據リタリ

一明治四十四年本邦鑄業ノ趨勢ニ掲ケタル同年及其以前ニ係ル統計ニシテ本書ト對比シ差異アルモノハ本書ニ掲クルモノヲ以テ正トス

一輸出入ニ關スル事項ハ大藏省關稅局ノ調査ニ基キ、外國鑄產ニ付テハ一九一年「ミネラルインダストリー」ニ據リタリ

一放資額ニ關スル事項ハ官報廣告ニ基キ調査セリ

大正二年三月

凡
例

大明治四十五年本邦鑛業ノ趨勢

總 說

明治四十年下半期以來一般經濟界不振ノ影響并鑛產物市價ノ不況ニ依リ沈滯ノ狀況ヲ呈セシ我鑛業界ハ四十四年ニ至リ石炭ノ需要増加并鑛產物價格ノ好氣配ニ向ヘルアリテ幾分恢復ノ曙光ヲ示セシカ本年ニ入り銀、銅ヲ首メ其他諸鑛物ノ市價益々昂騰シ内外ノ市況共ニ良好ナリシニ因リ新ニ事業ヲ開始シ又ハ既設事業ノ擴張ヲ爲シタルモノ茲ニ多キヲ加へ之カ爲メ以下各項ニ於テ述フルカ如ク其成績前年ニ比シ更ニ歩ヲ進メ斯業ノ發展上著シキ進歩ヲ認ムルヲ得ヘシ
今之レヲ出願ニ觀ルニ其總數ハ五千四百八十五件ニ達シ前年ニ比シテ二割九分、前々年ニ比スレハ四割四分ノ増加ヲ示シ

鑛區ハ試掘四千八百八十三、採掘五千四百十一、砂鑛千五百四十三ニシテ試掘ハ前年ニ比シ一割四分ヲ増加シ採掘ニ付テハ一分強ノ減少トナレルモ之レ鑛區合併ニ基クモノニシテ其面積ニ於テハ三分ノ増加トナリ殊ニ稼業鑛區面積ノ増加ハ近時ニ於テ最モ著シキモノニ屬セリ

鑛產ハ鑛業ノ發達ニ伴之年々增加ノ趨勢ヲ持續シ本年ニ於テモ石油其他二三雜鑛物ノ減少ヲ示セル外何レモ増加シ殊ニ銅及石炭ノ增進ハ近年ニ於ケル稀ナル率ヲ示シ其總價額ハ未曾有ノ巨額ニ上リ約一億三千二百三十六萬餘圓ト算セラレ前年ニ比シテハ二割五分、又既往ニ於テ最モ多額ナリ

シ明治四十年ノ盛時ニ比スルモ尙ホ約二割ノ増加ヲ示シタリ
鑛產物貿易額ハ其總額一億五千百二十八萬三千餘圓ニ達シ前年ニ比シ二千五百八十万餘圓ヲ増加セリ之レ全ク主要輸出品タル銅、石炭、硫黃ノ輸出増進セルト鐵類ノ輸入千六百餘萬圓ノ劇増アリタルニ因レリ

會社組織ニ依リ放下セラレタル鑛業資本額ハ會社ノ新設ニ依ルモノ千四百五十八萬餘圓(拂込額千三百六十一萬餘圓)既設會社ノ増資ニ係ルモノ二百四十六萬餘圓(拂込額二百四十六萬餘圓)合計千七百四萬餘圓(拂込額千六百八萬餘圓)ナリ而シテ同年中解散若クハ減資ニ依リ減少セシモノ千三百二萬餘圓(拂込額四百七十六萬餘圓)ヲ加除セハ結局大正元年末現存セル資本額ハ二億二千百六十九萬餘圓(拂込額一億七千五百五十二萬餘圓(拂込額ナ含ム))ノ巨額ニ達シ之ヲ前年末現在額ニ比スレハ資本額ニ於テ四百二萬餘圓拂込額ニ於テ千五百八十五萬餘圓ヲ増加シタリ

鑛產物ノ市價ハ稀有ノ盛況ニシテ年内平均市價ハ前年ニ比シ安質母尼ノ僅カニ低落シタル外諸鑛物一様ニ騰貴シ就中銅ノ二割九分ヲ最トシ鉛、鐵、原油ノ何レモ二割強、銀錫ノ一割強ニ達セルモノ共

ニ注目スヘキ所ナリ

鑛山事業ニ付テハ同年中新ニ事業ニ着手シタルモノ三百三十一事業ヲ擴張シタルモノ二百三十六ニ達セリ而シテ事業上特ニ注目スヘキハ輓近技術ノ進歩ト共ニ企圖擴大シ從ツテ機械力ノ應用漸ク盛大ヲ來セルモノ即チ是ナリ之カ爲メ鑛山經營上ニ及ホス經濟的効果ニ至ツテハ蓋シ沒スハカラナルモノアルヲ見ル

第一圖

